

# 日本におけるキリスト教の歩み

## その2 迫害中期から徳川禁教令迄

1606年ヴァリニャーノ神父マカオで帰天

豊臣秀吉の出した禁教令は、イエズス会の知行地・長崎を没収。また大村から宣教師を追放。大村領内にいた宣教師たちは、徳川家康からの新たな禁教令が出る迄、領内に留まるも、大村から教会が消えるにつれ身の危険を察知。そのごの宣教師追放、大名への棄教指示は、迫害へと繋がった。遂にキリシタン大名達は、厳しい弾圧に耐えきれず次々に棄教した。その中には天正少年使節の千々石ミゲルもいた。

将軍徳川家康は、肥前の加藤清正、平戸の松浦鎮信、そして背教者の五島純玄等を上手く使ってキリシタン大名たちを棄教に追い込んでいった。

南蛮貿易は、利権がらみ。有馬の船がシャムからの帰途、マカオに寄港した際、事件が起きた。有馬の家臣らが殺害され、それを機にポルトガル船が長崎に入港した時、有馬と長崎奉行・長谷川は、手を組み船もろとも爆沈。結果、イエズス会と奉行長谷川は、対立。家康とのパイプ役を担った宣教師ロドリゲスは国外追放。もう一つの事件は、当時有馬は、秀吉時代に失った旧領地の返還を願っていた。そこで有馬は、岡本大八に賄賂の計画をしたが、逆に大八の詐欺にあい事件が表沙汰になった。その結果、大八は処刑、有馬も駿府で処刑となった。キリシタン同士の争いは、幕府側にキリスト教不信感を一層募らせた。

1614年2月  
セルケイラ司教帰天

秀吉の後を継いだキリスト教嫌いの徳川家康であったが、美味しい南蛮貿易の仲介役を担う宣教師を必要としていた為もあり、公に禁教令を出すのを控えていた。しかし、キリシタンへの姿勢は非常に厳格で1605年政権を秀忠に渡すと、即座に彼の名で禁教令を出した。それ故、小倉にいた全宣教師を追放。伊東マンショ神父も追放され1612年長崎で帰天。五畿内の教会全て閉鎖、中心的な信者は追放(この中にジョアン原主水、おたあジュリアがいた)。有馬直純は、奉行長谷川に盲従し、全ての宣教師を追放、教会、セミナリヨも破壊した。そこにいた生徒たちは、長崎のトードス・オス・サントス教会へ逃げ、嵐が鎮まるのを期待したが、希望の光は消えた。有馬直純は、家臣に棄教を命令したが、殆どの家臣は従わなかった。その結果、多くの者が不従順さゆえ血を流した。1613年10月有馬の領内で大殉教。そこに駆けつけた信者は二万人、この知らせは日本全土に広まった。またこの大殉教は、有馬だけに止らず、江戸にも広がった。しかし、その他の地域では、平和を保ち、長崎では二つの新たな教会が建てられていた。また仙台では、伊達政宗の使節として、支倉常長がローマに向けて出帆した。この時代、殉教するもの、平安な教会生活、ローマへ使節と不思議な時代であった。しかし、家康のキリシタン嫌いの熾烈さは、確実に形となって日本全土に非情な暗雲を広げた。

セルケイラ司教

1603年徳川家康  
江戸へ幕府

戦国時代

1  
4  
9  
3

1605年4月将軍家康  
から第2大將軍秀忠に

1  
6  
1  
5

1612年遂に禁教令発布

大坂の陣  
1614-1615

1616年4月  
徳川家康駿府で死去